

舞台で見せる日本画の可能性

・ 一 日 個 展 ・

An opening up of Possibility of how to show Japanese Painting art
—One day Exhibition with Music on the Stage—

田代有樹女

Yukijyo Tashiro



■はじめに

舞台に置く絵画でありながら、書き割りではないという考え方で、日本画の可能性を探った。

日本画に限らず絵画の目的は多様である。心のままの目的のない絵画もある。近年は展覧会のための絵画が圧倒的に増えたが、元来例えば肖像画は記録としての、また宗教絵画、壁画、デザイン画など種類をあげれば枚挙に暇はないがそれらは文化として重要な役割りを果たしている。特に日本では中世より建築部分としての襖や家具である屏風が、荘厳や装飾を目的とした障屏画として華やかな充実を見せた。

今回の試では音楽との融合を目的とした日本画を制作した上で、それを住空間や展覧会場の壁面で見せるのではなく、舞台に置き、音楽との相乗関係から日本画をどのように見せる事ができるのか、どのような可能性があるのかを焦点に、舞台で見せる日本画の可能性を求めてみた。

■計画・準備

まず制約された条件（A）と、自ら設定した条件（B）を考慮に入れ計画・準備した。（A）（B）は次の如くである。

- （A）制約された最小条件は、①絵を飾る場所が、コンサートホールの間口約12.6m、奥行約6.3mの舞台であり、通常の絵画観賞の場としては広すぎる空間である。②ホールの性格上、作品は掛けずに置く。③音響の関係から舞台の高さ一杯までパネルを塞がない。④音楽は声楽ソプラノで曲目はプログラムⅠでは「幽韻」5曲と「淡彩抄」10曲、プログラムⅡでは「植物都市」より4曲と「中田喜直歌曲集」より5曲の日本の心を歌うものである。
- （B）自ら設定する条件は、①書き割りではないという考え方を基本とし、画面構成の上で制作心にそぐわない誇張や拡大・省略などを避ける。②細かい細密描写を見せるための物ではないがあえて細かく描く事もある。③和紙と岩絵の具を用いた濃彩画とし、濃厚に塗り重ねた岩肌の効果を探る。③作品のテーマが歌手の心の邪魔にならぬよう心掛ける。④最も重要な条件として作品内容が歌詞の説明になったり、テーマを曲に合わせるのではなく独自のテーマでありながら違和感なくどれ程融合するのかを課題とする。

■制作

以上の条件を基本に、24曲の曲想からのイメージを暖めて制作した作品は、プログラムⅠでは四曲屏風仕立ての「綾悠々」(縦180×横480cm)、Ⅱでは「宙賛華」(縦150×横570cm)と「散華」(縦116.5×横91cm)のシンプルなものとなり、絵を曲の途中で入れ替えず最初と幕間に設置することにした。従ってプログラムⅠでは23分57秒、Ⅱでは35分51秒間に亘って、同一画面を見せることになる。その間に変化をもたらせるため、まず画面構成で工夫し「綾悠々」では屏風の形態をとり、第二扇を他と関連させながら別画面にした。「宙賛華」は5枚の絵を繋げる事によりシンメトリの1枚とした。舞台での工夫は設置場所と照明で、曲やフレーズに即した照明をデザインすると共に、特にプログラムⅠの「幽韻」では屏風第二扇のみの照明とした。Ⅱの後半では連作の「散華」を、上手の離れた所に置設し広がりと変化をもたせた。また当日の偶然性も重要な要素と考えた。

■実践

本試みの実践は「『日本の心』うたう・えがくジョイントリサイタル」と題し、2001年1月23日火曜日、午後7時より名古屋伏見電気文化会館のザコンサートホールで行った。ソプラノは栗田啓子、ピアノは塚田佳男、日本画は田代有樹女で、音楽ではコンサート、絵画では一日個展の形式となり、音楽と絵画の融合を試みるものである。

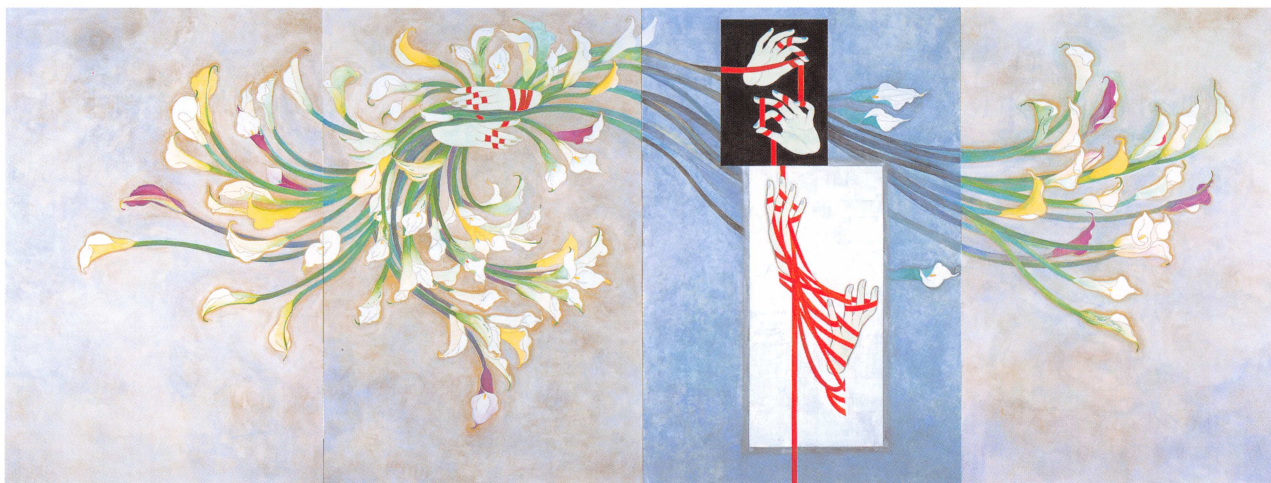
■おわりに

以上の結果、日本画を舞台で見せることは見せ方を考慮すれば充分可能であり、音楽との融合では違和感なく計画通りの成果を果たすことができた。又濃彩日本画ならではの岩肌のマチエールと描き込みによる厚みが、緻密な強さとなり、凹凸は照明の効果をより高めることを確認した。広い空間における絵画観賞では細部の確認は無理であるが、あえて行った細かい描写部分は彩りとして効果があった。歌も絵画があることにより一層深まり相乗効果を発揮した。多くの感想の中に癒しの効果の大きかった事が指摘されている。総じて結果は成功と言えよう。

■当日の様子は次頁より写真で掲げておく。

■作品内容とプログラムについては末尾にプログラムより引用する。

プログラムⅠ



■日本画「綾悠々」180×480cm〔屏風〕

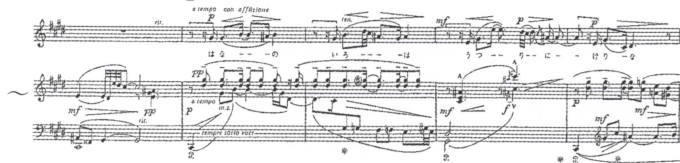


①



■曲目「幽韻」

はなのいろは ①



②



天の川 ③



青蜜柑 ④



「淡彩抄」

泡 ⑤

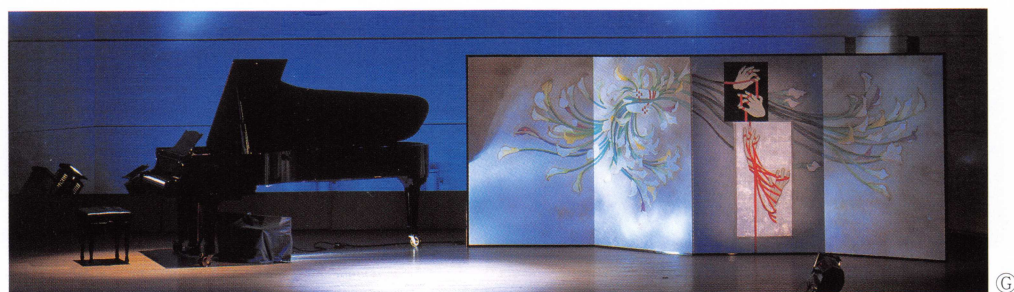
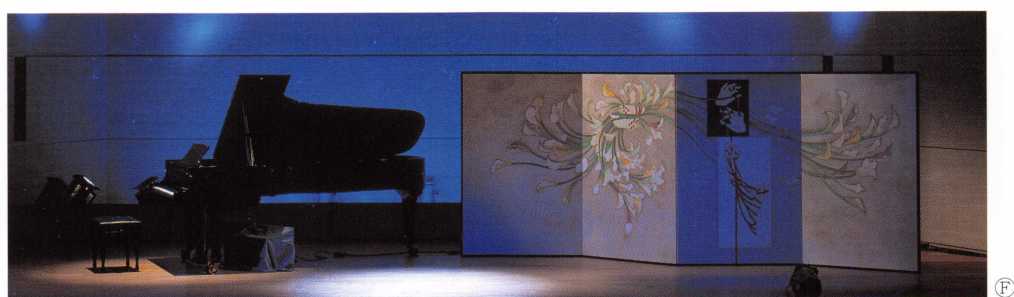


涼雨 ⑥



春近き日に ⑦

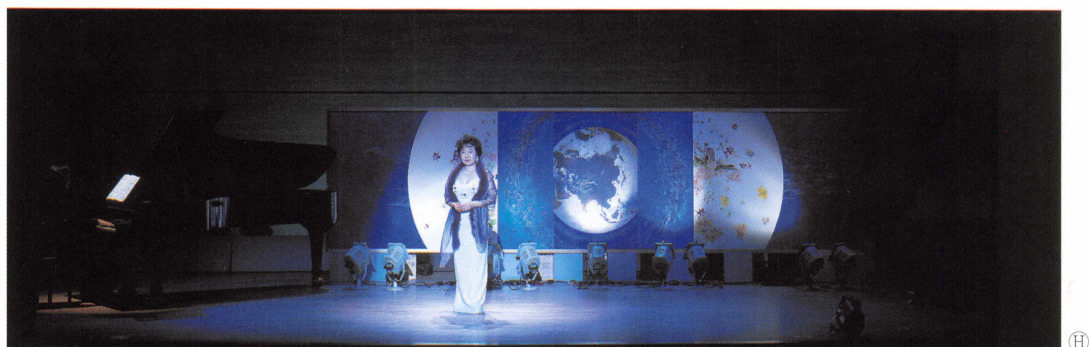




プログラムⅡ



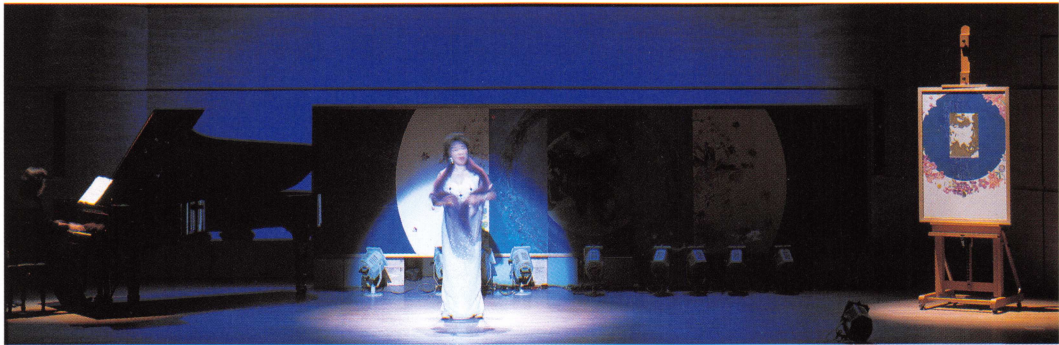
■日本画「宙賛華」150×570cm



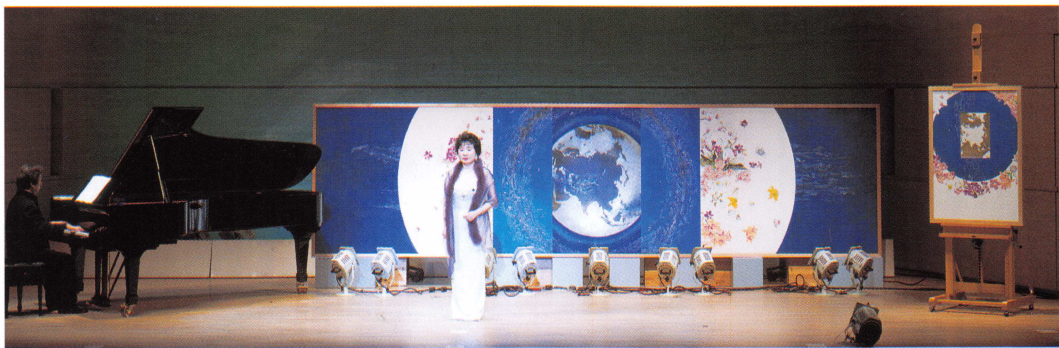
■曲目「架空歌劇のための詠唱集」（「植物都市」より） 早春[㊦] 五月の記憶[㊩] 夏の魔女[㊪] 青い馬[㊫]



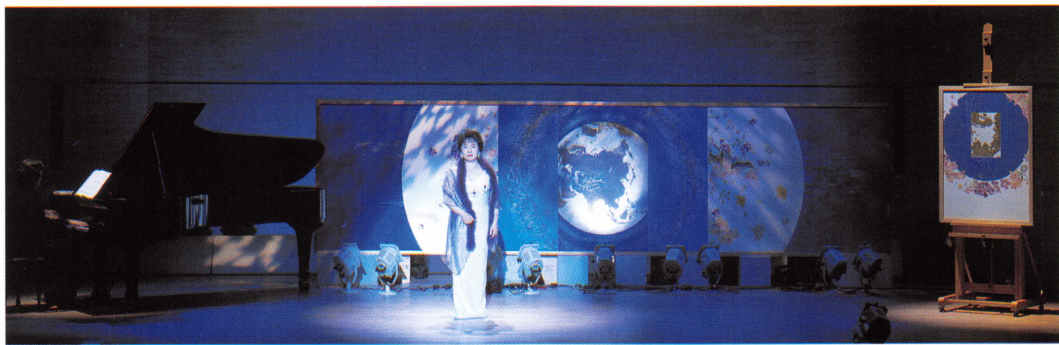
■「散華」 116.5×91cm



Ⓚ



Ⓛ



Ⓜ

■曲目「中田喜直歌曲集」より Ⓚ Ⓛ Ⓜ

プログラム		ソプラノ：栗田啓子	ピアノ：塚田佳男	日本画：田代有樹女
(Ⅰ)		(Ⅱ)		
山田 耕侖 「幽韻」 Ⅰ はなのいろは 小野 小町 歌 Ⅱ わすらるる 右 近 歌 Ⅲ あらざらむ 和 泉 式 部 歌 Ⅳ あまのをよ 式子内親王 歌 Ⅴ わがそでは 二條院讃岐 歌 別宮 貞雄 「淡彩抄」 大 木 惇 夫 作詞 Ⅰ 泡 VI 燈 Ⅱ 蜩 VII 天の川 Ⅲ 入墨子 VIII 青蜜柑 Ⅳ 涼雨 IX 鶯 Ⅴ 別後 X 春近き日に ◆日本画 <small>あやゆうゆう</small> 「綾悠々」180×480cm〔屏風〕		溝上日出雄 架空歌劇のための詠唱集「植物都市」より 尾崎左永子 詩 Ⅰ 早春 Ⅱ 五月の記憶 Ⅲ 夏の魔女 Ⅳ 青い馬 中田 喜直 Ⅰ 未知の扉 宮 本 正 清 作詞 Ⅱ あかあさん 堀 内 幸 枝 作詞 Ⅲ 霧と話した 鎌 田 忠 良 作詞 Ⅳ 悲しくなったときは 寺 山 修 司 作詞 Ⅴ ゆく春 小 野 芳 照 作詞 ◆日本画 <small>ちゅうさん げ</small> 「宙賛華」150×570cm・「散華」116.×91cm		

照明デザイン／田代有樹女 アドバイス／古川靖 協力／(株)若尾綜合舞台 (株)川口春霞堂

日本画制作に寄せて

田代有樹女

舞台に置く絵画でありながら、書き割りではないと言う考え方で、日本画の可能性を探ってみました。そして作品のテーマが歌手の心の邪魔にならないよう心掛け、また歌詞の説明になったり、テーマを曲に合わせるのではなく、独自のテーマながら違和感なくマッチし、相乗的な自然観が舞台効果となるように念じて描きました。舞台を意識する意味では照明の効果も少々考慮に入れました。

■プログラムⅠ 画題 あやゆうゆう「綾悠々」縦180cm 横480cm〔屏風〕

人生は時には簡単な、時には入り組んだ糸を操る、綾取りのようなもの感じます。糸の絡みがいくらややこしくても、解きほぐせば美しい一本の糸に戻ります。我々は流れる時の中で、一定方向の、まるで死に向かう一方通行のような道程を前進するのみで、いくら幸せでも又いくら辛い事が押し寄せても、人生の終焉と共にそれらは全て消え去り、自然の一部である人間に帰還するのです。一定方向の道を綾糸に例え、一本の糸を手で操るように比喩的に表現してみたくなりました。カラーの花をあしらったのは、その花の清清さと力強さが気に入っていることと、「幽韻」「淡彩抄」のいずれの歌詞の中にも含まれない植物でありながら、曲のイメージを引き寄せたからです。茎の流れを綾にもみたて動的に表現し、薄色の花と赤糸のコントラストで画面構成をし、曲想から受ける、淡泊ながら強く深い味わいと、つかず離れず絡み合う事を願って描きました。

■プログラムⅡ 画題 ちゅうさん げ「宙賛華」縦150cm 横570cm ・「散華」縦116.5cm 横91cm

文字通りの宇宙です。人は素晴らしいものですがその力でどれ程の事ができるのでしょうか。生きとしいける物は何時までも生きていたいと思うでしょう。しかし裏腹に必ずどこかへ行ってしまうか帰ります。生も死も全てを含んで宇宙は成り立ちます。これほどの神秘を一体誰が造ったのでしょうか。私は只ただ賛美の念を捧げる気持ちになるばかりです。好きな青で飾りましょう。明るい花を散らしましょう。「架空歌劇のための詠唱集」と「中田喜直歌曲集」からは心に染み入る、厳しさと甘美さを感じます。無常の中で生かされている事に身を委ね、装飾的に表現することで、深刻にならないように心掛け描きました。

写真 成田貴亨・馬淵 望